
リベンジ！

重装改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リベンジ！

【Nコード】

N7094Z

【作者名】

重装改

【あらすじ】

四年前、十九年間育ててきてくれた恩師を目の前で殺された青年と、その死の原因となってしまう魔機の操者。四年ぶりに思わぬ形で再会した彼らは……

天地物語の息抜きで書いているので、非常に不定期です。ご了承ください。

あと、たまに技名叫ぶかもしれないので、苦手な人はご注意ください。

四年前

バルグ国の不落壁　　例えば、

『早朝に周りを走り始めたら一周する頃には次の日の出を迎える』

『生えようとした雑草が見張り番に睨まれたただでみるみる萎れた』

『見張り番がグツと握りこぶしを作っただけで、賊の自走砲が吹き飛んだ』

『心なしか、見張り番の方が国王よりも偉そうだ』

など、酒場の笑い話やお国自慢には欠かせない。

今、その壁の外に広がる広大な景色が戦火によって薙ぎ払われ、そして焼き尽くされていた。

戦場に立っている者は大きく分けて二種類だ。

一つは、大きい物は三機積みば城壁の壁に届く程の甲冑然とした巨大な機体。

魔力を込めた魔石を媒介に動く、通称……　魔機。

そしてもう一つは、連なる黄色の単眼、黒光りする表皮、ヨダレが滴る牙、一目見て外敵とわかる、非常に醜悪な怪物。

空の裂け目から降りてくるその様子から、　異界獣　と呼ばれている。

これら以外は乱戦の煽りを受けて全て跡形も無い。

何故、異界獣は人々を襲うのか。

何故、異界獣は空の裂け目から表れるのか。

何故、何故、何故……！

わかる事は一つ、連中の侵入を許したが最期。

国は、滅ぶ。

「こちら、不落壁監視隊のギャラク！　ダメだ、突破される、うつ、く、来るな、来るなああああ！」

白地の身体、紺色の右腕という不落壁北部監視隊の正式カラーリ

ングの魔機、 ブロン・ブロン。

民衆の安全と平和の象徴が、異界獣の触手と爪にズタズタにされて崩れ落ちる。

戦線は広く濃密に敷かれていたが、しかしここに一瞬出来たほんの一つの小さな穴。

異界獣の最大の特徴は、 自身の一瞬の変形 である。

先程まで二足の獣を象っていたそれらは、一瞬で翼を生やし小さな隙間に突撃をかける。

もちろん、残存した監視隊と駆け付けた国境偵察隊の戦力で懸命に止めにかかるが、カバー仕切れなくなった隙を突き崩すように三体の異界獣が風を切って高く飛び上がり、不落壁を越えてしまった。
「まずい、抜けられた！」

「気を散らすな！ 後続が来るぞ！」

「今はこれ以上の侵入を、阻む！」

不落壁と城下街の間には、日の出から歩いてお昼時になる距離の隙間があり、農地や放牧地はここにある。

しかし、そこには、普段は存在し得ない者があった。

純白に輝く剣を握った、 白銀 の魔機である。

その名は、シルヴァリス。

魔機は異界獣との、つまり地表から不落壁までの距離を一瞬で詰め、一番近くにいた一体を反撃の隙も与えず切り刻む。

「隊長、増援です！ あ、あれは…… 銀色 ？ セル・バンではありませんが、銀色です！」

「なにっ本当か、ロツツ！ 本当に 銀色 だと！？」

「国王親衛隊！ それほどの敵、か……」

基本的に装飾や彩色は騎士の自由とされる魔機だが、絶対に使ってはならない 忌み色 というものがある。

その内、 漆黒 は異界獣の色であり、誤射を防ぐ為について最近決められた色だが、 金 と 銀 は遥か昔からとある一つの集団を除いて、使用、即死刑という重大な罰則が設けられている。

国王親衛隊……その忌み色を使う事を許された、トップエリート。ちなみに、シルヴァリスは正式採用されたセル・バンの次世代機にあたる。

鋭角的な頭部の頂点に煌めく、鷹を模した金の装飾……この装飾は一人一人違い、どれも国王直々に認められた証拠である。

シルヴァリスは全速力で市街地へ飛び、異界獣を追い詰めて空を翔ける。「親衛隊とは確執も深いが、それどころではないな。……頑張れよお、銀色！」

「娘を頼む！」

不落壁周囲の防衛隊に発破をかけられ、異界獣を追って市街地へ突入する。

「さて、助けに出たのに励まされるとは、初陣がばれたかな？ シルヴァリス」

シルヴァリスは何も反応せず、操者の動かし方通りにただ愚直に異界獣を追い詰めつつ市民の避難路から徐々に遠ざける。

しびれを切らしたのか、異界獣の一体が体の一部を銃に変形させた。

「さっきの剣が恐くつての銃撃戦のつもりなら、この距離で負けはしない！」

操者の叫びに同調して赤い目を光らせるシルヴァリス。

「光れよ、剣！」

異界獣が無数の弾丸を放つと同時にシルヴァリスが剣を一振りした刹那、それら全ては虚空に掻き消え、異界獣が剣の軌跡を描いて真つ二つになり、ドロドロと溶けだした。

異界獣が自身を象る為に必要な『核』を焼き切ったのだ。

一体目は、仮に核が残っていようがあれだけ細切れにされた以上、生命維持が不可能になって即死したであろう。

逆に言えば、核が有るならば余程丹念にバラさない限りは異界獣は死なないし、異界獣毎にコアの位置はまるで違う。

一体を片付けて一息ついた操者だが、己が重大なミスを犯した事

に気がついた。

残った一体に距離をとられてしまったのだ。

逃げられたと言ってもいい。

「もう一体……シルヴァリス、よく見る！」

操者は魔力を赤い目に注ぎ、落日の方向に黒い影を見出だした。

「よくもまあ……奴は逃げを決め込んだ、翔けるっシルヴァリス！」

異界獣は、速く、そして見つかりにくくなるために体を円盤状に変形させて飛んでいた。

しかし、それでもシルヴァリスは更に速かった。

距離を詰めて下に回り込み、切り刻まんと剣を構える。

「沈め、異界獣！……う、うわあっ！？」

異界獣はまるで読んでいたと言わんばかりに下部に銃口を密集させていた。

「こちらじゃない。奴の狙いは市街地！」

操者は、剣と利き腕に集めた魔力全てを全身の外に流し込む。

「うううううっ！」

銃口からばらまかれた弾丸をシルヴァリスから展開した力場で防ごうとするが、全身に回りきらない。

「左足損傷拡大、だと！？ 魔力を使いすぎた？ そ、そんな馬鹿な……」

訓練とは違う連戦というものに操者は恐怖を覚えた。

「いいや、まだ、まだまだっ！」

気合いを入れるも、敵の銃撃は止まず操者の魔力は減る一方。

外は未だ激戦故に増援の見込みは無く、頭部の鷹も片羽が欠ける。市民のシルヴァリスを見つめる目も徐々に当初の希望に溢れたものから、不安と絶望の混じったそれになる。

「ドミしさいさま、ケビン、ぎんいろさんがあぶないよ！」

「ドミしさいもケビンもおうえんしようよ！」

子供二人にドミとケビンと呼ばれた眼鏡をかけた禿頭の老人と金髪青年は、それぞれを礼拝堂の地下に引きずり込む。

「わかったから、マリーもバルザックもとつと地下に入れ！あと、ケビン司祭見習いだ、呼び捨てるな！」

「こらこら、子供相手にムキになるな。地下で点呼をとってきてくれ、万が一がある」

「わかりました、司祭様！」

ここの礼拝堂の地下は普段は身寄りの無い子供達の飯のねぐらであり、ケビンもそうだった浮浪児の出である。

しかし今は逃げ込んだ市民でいっぱいであり、もし子供が一人二人いなくても気づかない場合もありえる。

数分後、息を切らせたケビンが顔を青ざめさせて絶望的な一言を発した。

「ハア、ハア、ハア……し、司祭様！カーチスが、どこにも、いません！」

子供の一人がいない……避難の際に逃げ遅れたのだ！

「ハア、ハア……司祭様！俺が、行きます！」

「ダメだ！ウチの礼拝堂は無駄に階段があるからな、疲れたろう。私が行く！」

「あつ、司祭様！」

司祭はケビンが止める前に駆け出して、あつという間に市街を縫って見えなくなってしまった。

「司祭様……」

一方、市街上空でも決着がつこうとしていた。

シルヴァリスに埋められた魔石の魔力と操者の魔力、両方が尽きようとしていたのだ。

「どうすればいい……どうすれば……くそあつ、シルヴァリス！そして市街。」

「しさいさまあああ……」

「よしよし、足をくじいたのか。任せなさい」

ドミ司祭はガレキの中からカーチスを引きずり出し、脇に抱えて走り出した。

（あの銀色は攻めあぐねている。……いや、勝てるぞ！）

「おーいつ聞けええええ！」

「何だ……？ 老人と子供、逃げ遅れたか！？」

シルヴァリスの操者が半ば諦めて意識を散らしていたのが幸いした。

「聞けっ！ 市民はあらかた避難した。力場を解いて左手と右手の剣に魔力をありったけ注ぎ込め！」

「力場を解けたと！？ 死ねと言うか、ご老体！」

それを聞いて司祭は操者が非常に焦っているのを感じ取った。

「いいから、さつさと！ 遅かれ早かれ死ぬなら……敵の首でも、討ち取って見せる！」

「……！ おっしやる通りだ、左手と剣だな！ それで次は！？」
決意がついたか、先程よりは焦りが抜けた声で操者が次の指示を求める。

「左手で相手を思いつきり、ぶん殴れ！」

「なっ！？ いや、承知した！」

シルヴァリスを覆っていた力場が解けた次の瞬間、異界獣の肉体で形成された弾丸の豪雨に晒され、装甲がちぎれ飛ぶ。

「ぐうっ、こいつ、沈め、よおおおっ！」

シルヴァリスが、魔力を溜めた拳を叩き込む！

しかし、異界獣は銃口になっていた部分の大半を移動させて何ともないように防いでみせた。

「だ、だめだ……」

「諦めるな、むしろ好機だ！ 対角線上に剣を！」

「！」

司祭の言葉の意味を悟った操者はシルヴァリスの右手に握った剣を、左手に気をとられて守りも攻めも手薄になった異界獣に突き込み、そのまま左へ左へと……

「切り刻む！」

異界獣も残った銃口で反撃を試みる、が……

「遅おいつ！」

射出するより先に自身を真つ二つにされ、沈黙した。

「や、やった。やりました、ご老体！」

操者が勝鬨の声を上げるが、そこには既にドミ司祭もカーチスもいなかった。

「ハハッ、挨拶ぐらいさせてくれてもいいだろうに……」

「司祭、それにカーチスも！ ご無事で！？」

「ああ、ケビン。あの魔機のおかげでね」

遠方に控えるシルヴァリスを指す司祭。

「見たことがない奴ですね」

「そうだね。……大きくなったものだ」

「今、なんと？」

最後の台詞を聞き取れなかったのか、ケビンが聞き返す。

「いやいや、なんでもない。おお、カーチスを忘れていたよ、しばらく立てそうにはないがな」

「ケビン、こわかったよおお！」

「呼び捨てすんな！」

「ハハハ……」

全ての脅威が去った。

人々は礼拝堂の地下からおっかなびつくり出てきてその事実を再確認すると、シルヴァリスに向けて歓声を送った。

「よくやった！」

「さすが親衛隊！」

「国王バンザイ！」

異界獣は地に倒れ伏し、白銀の魔機、シルヴァリスはボロボロながらもそこに立っていた。

誰がこれを敗北と言おうか。

そう、異界獣は、『倒れ伏していた』。

異界獣の周りでナメクジか何かがいずる様な音がしたのを、司

祭は聞き逃さなかった。

「跳べ、銀色！」

「な、なにっ!？」

異界獣の触手がシルヴァリスの少し下を掠める。

司祭が気づくのがあと一瞬遅かったらシルヴァリスは粉々だっただろう。

「怪物が、生きてる？」

「に、逃げろ」

「逃げろおおおおお!!」

市民が、地下になだれ込む。

その軌道には、まだカーチスを抱えたままのドミ司祭がいたが、彼らは完全に理性を失っていた。

「どけっ、ジジイ！」

命の為なら今は走りを止めるどころではないのだ。

例え、自らに安全な場所を提供してくれた恩人が目の前にいようが。

「くっ。ケビン、カーチスを受け取れ！ 後は頼……」

「うっ！ し、司祭様！」

カーチスを受け取ったケビンは、自分を赤子の頃から十九年間育てて下さったドミ司祭が人々の波に薙ぎ倒されてボロ雑巾のような姿になる様を見届けた。

「き、貴様ら、よくも！」

見届けてしまった。

「このっ、このおおおっ！ 光れ……剣！」

白銀の魔機が残った全ての魔力を振り絞り、異界獣をバラバラにする。

しかし、全ては手遅れだ。

「ご老体、そんな、嘘だ……」

操者もまた、司祭の壮絶な最期、関わった時間が少なくとも傑物

だとわかる偉人の余りにも不条理な最期を見届けてしまった。

そして、その死に様の原因は、間違いなく自身の油断だ。

「金の、鷹……」

「えっ？」

操者は音声を拾い、またそれが司祭の死の寸前に一、二言会話をしていた青年であることに気づいた。

「仮面と変声機でお前がわからなくとも……」

操者は内心祈った。

「お前が、トドメを刺していれば！」

やめてくれ、それ以上何も言わないでくれ……と。

「覚えたぞ、その鷹の飾り！ 覚えたぞおおっ！ 絶対に、絶対に殺してやるっ、殺してやるからなあああ！」

現実は何ビンにとつても操者にとつても残酷だった。

極めて、残酷だった。

復讐の始まり（１）

月日が経つのは早いもので、不落壁を巡る攻防、シルヴァリスとその操者の初陣、そしてドミ司祭の死から四年が過ぎた。大陸中を震撼させ、大陸全ての国家が同盟を結ぶきつかけになった異界獣達もいつの間にかいなくなり、あの頃孤児だった連中は無事に働き口を見つけて独り立ちした。

「では、皆さん。世界と我らを創り今日も我らを見守る六神に祈りましょう……」

二十三歳になったケ빈は、ドミの後釜として司祭に任命された。

「じゃあな、ケ빈！」

「こんのクソガキ！ ケ빈『司祭』だ！」

「さようなら、司祭様」

「さよなら奥さん、旦那さんによろしく！ 脚を治したら、一緒に飲みに行きましょうって！」

根っこのところは相変わらずだが。

「ケ빈さん、ご飯でゴザルよー」

「お、ちようどそんな時間だな！ ありがとよ、ムラマサ」

焼いたパンとシチューを両手に礼拝堂のドアを蹴破ってケ빈を呼んだ、出る場所は出て締まるところは締まった、エプロン姿の女の子。

ムラマサ、本名不明の元浮浪者で、現在唯一の礼拝堂地下の住人である。

本人曰く、海の方こうからさすらいにさすらってバルグ国に流れ着いたとか。

二人は表から礼拝堂に続く階段に腰掛け、食事に手をつけた。

「いやー、拙者がここにかくまわれてから一年。時間は凄まじいでゴザルなあ」

「あの時は髪の毛ボサボサでめちやくちやでゴチャゴチャ着込んで風呂に入れるまで女の子ともわからなかったなあ」

ケ빈は、死人同然の彼女の首根っこを掴んで風呂場まで引きずり込んで服とフードのついたマントを脱がした時の、わりと大きい胸と、羞恥で赤く染まった可愛らしい顔つきをしみじみと思い出した。

「お風呂は、偉大でゴザル……。見て下さい、この艶！」

ムラマサはそういつて自分の黒い長髪を自慢げに見せつけた。

「髪にシチューについても知らんぞ。あと、そのわざとらしいゴザル口調も、だいぶ板についてきたな」

「そうそう、当事はちよくちよく地が出て……って、違うでゴザルよ！？ これは元から、元からでゴジャル！」

「噛んだぞ、思いつきり。まあ、別にいいよ。ムラマサにはムラマサなりの事情があるんだろ？ 追求する気もないさ」

「ケ빈さんにはいつも世話になっていて申し訳なく思っばかりで、うっ、うっ……ケホケホ！」

「だあっ、飯食いながら感極まるな！ 案の定咳込むし、汚いし！」顔を拭いながらケ빈はムラマサの言葉を反芻した。

「……あれから、四年経ったか」

「一年でゴザル」

「お前じゃないよ！ ドミ司祭は今の俺をどう評価なさって下さるだろうか……」

空をぼおつと見上げるケ빈を見て、ムラマサは自分の考えを口にした。

「自分より五つ年下の女の子と一つ屋根の下で爛れた生活を送っているでゴザル」

「八割以上はお前のせいだよ！ ここ以外の働き口を見つけてよ！ 間髪入れずにツツコミを入れるケ빈。」

付き合い長いだけあり阿吽の呼吸である。

「だが、確かにこんな姿は見せられないなあ。アイツも見つからな

いし」

「アイツ……ケビンさんが言っていた、仮面ヤローでゴザルね？」

「その通り。聞けばあの日の後に親衛隊を辞めちまったらしいじゃあないか」

「確か、不落壁のどこかに就いたらしいでゴザル」

「会いに行つてぶん殴りたいのは山々だが、ここからじゃあ一日半はかかるし、あまりここを離れるわけにもいかないからなあ……」

「仕事なら、拙者も手伝えるでゴザルよ？」

「人見知り万々歳、だな。けっ」

「いやあ、照れるでゴザル……」

「褒めとらん！」

意外なことにムラマサは極度の人見知りで、ケビンに拾われた後も礼拝堂地下からろくに出たがらなかった。

その分ケビンの仕事ぶりはよく見ており、持ち前の飲み込みの速さも手伝つて今では四年前のケビン以上には働くことができる。

「気持ちはいがたいけれど違うんだよ。ほら、お前が来た頃から何やら変な連中が 天へと続く道 とか言う宗教を追っ立てたじゃあないか」

「順序が逆でゴザル。拙者が来た頃には既に連中は追っ立てていたでゴザル」

「あれっ、そうだっけ。まあ、いろいろ過激な連中だし礼拝堂やムラマサを置いてきぼりには出来ないよ」

天へと続く道。

異界獣がいなくなった近年に広まりだしたそれは、教祖にして唯一神のジンという男が人の心に安らぎをもたらしてみせるという物で、教祖に手をかざされた男の動かなくなった半身が治った、だの逸話には事欠かない。

「まあ、祈願祭みたいな行事はまだ先だし。暇を見て見張りでも雇つてみるかね」

「そうと決まればお仕事でゴザル。頑張りましょう、ケビンさん」

「頼りにしてるぜ」

彼らはお互いに食事をすませ、傍からみたら非常に仲睦まじそうに礼拝堂に入っていた。

不落壁。

かつて異界獣を幾度と無く食い止めてきた壁は、今も国防の要所として機能している。

その屋上で、三機の魔機　ブロン・ブロン　が遙か遠方に目を見張らせていた。

その中から人影が一つ、腰部ハッチをあけて屋上に飛び出した。

「十二時、不審な物は見受けられず。見張りを交代し待機に入る、と」

壁に掛けられた紙に勤務の報告を書き綴った人影、魔機の操者は居るはずの交代を待った。

「すまない、ウェイン。交代か？」

少しした後、若い騎士に声をかけられ、ウェインと呼ばれた操者は返事をする。

「ええ、コバックス。ちょうど貴方に用があつたの」

ウェインは空色の瞳を不満げに細めた。

「わかつた、すぐに行くよ」

「お願いね」

ウェインは会話を済ませて踵を返したが、突然彼女から『クウーッ』と可愛らしい音が響いた。

いきなりなつた音にウェインはハツとし、それが自らの腹から出ていた事に気づくと、顔を真っ赤にする。

「ハハハ、尚更急がなきゃ。レディのお腹まで文句を言ってきたとは、よっぽどだ」

「もうっ、茶化さないでよ！」

恥ずかしそうに階段を駆け降りたウェインを見送ったあと、コバックスも魔機に乗り込み、機体のコンディションを示すパネルに目

を通す。

「魔力炉に異常無し、推進部、オートバランサ、装甲強度、排熱孔、視覚センサ、いずれも異常無し。……おや？」

彼は視覚の角にあった異物に気づき、そしてそれが何かも理解した。

「ウェインがこれを忘れるなんて珍しい。後で渡してやるか」

「休暇……ですか？」

「ああ、休暇だ」

当のウェインは食事を済ませた後、不落壁の西部ブロック隊長マクギニスに呼出しを受け、そして今に至る。

「私は特に問題ありませんが」

「いいや、あるね。一年中働き詰めでは肩に力が入り過ぎて下らないミスをするものさ。」

「はあ……」

「それに、部下に休暇を与えていないと風当たりが厳しくてね。私の頭もこれ以上寂しくしたくない」

マクギニスは自分の禿頭をさすって、苦笑いをした。

「……ではいくら程が良いでしょうか」

「そうだね、市街まで片道一日少し。なら一週間でどうだろうか？」

「わかりました」

「ブロン・ブロンを使うかい？ 片道十分少しまで縮むが」

「ご冗談を！……では、準備してまいります。」

隊長室の出口に向かったウェインは扉を開けると、はにかみながら振り返った。

「隊長！ 私の居ない間に西ブロックを陥落させないで下さいよ？」

「ハハハハハ……ぬかしたな！」

「ええ。ふふふ……」

隊長室に笑いが響く。

「それでは、失礼します！」

「ああ、いつてらっしやい」

扉が閉まる。

マクギニスはウェインの足音が遠ざかるのを聞き届けると、視点を机に向けて、深くため息をついた。

「オズワルド、リンは冗談を言えるまで立ち直ったぜ。お前は何をしているんだ……」

マクギニスが見つめる先には写真があった。

まだ生え際がすっかりしているマクギニスと、幼いウェイン、そしてもう一人、長髪と髭が目を引き男性、そして眼鏡をかけた禿頭の男性。

表情こそ硬いものの、四人ともそれぞれを信頼している事が感じ取れる写真であった。

礼拝堂。

すっかり疲れきった表情のケ빈は、部屋に入ってベッドを見るなり目の色を変えて飛び込んで、身体を大きく伸ばした。

「くはーっ、疲れた……」

『むにつ』

「キャッ！」

手の平に感じた柔らかな異物感と間の抜けた声に気がついたケ빈は、ベッドから異物感の正体……ムラマサを引きずり、部屋からほうり出した。

「あつ、どうしてそんな酷い仕打ちをするでゴザルか!？」

「いいからとっとと出てけ! お前には地下があるだろ!」

「嫌でゴザル! 二階の方が陽射しが暖かいのでゴザル!」

極めて真剣な面持ちで言い切るムラマサに、ケ빈は馬鹿馬鹿しなくなった。

「わかったわかった。そんな代わり、二人だから狭いぞ?」

「構わないのでゴザル。それに、二人の方がもつとあったかくて素

敵でゴザル。……ケビンさん、顔が赤いでゴザルよ?」

ケビンは指摘の通り、顔を真っ赤にしながらムラマサの首根っこを掴んでベッドに引きずり込む。

「なあんでお前は、そんな恥ずかしいこと平気で言えるかな!」

「人前では無理でゴザル、ケビンさんの前だからこそ言つのでゴザル」

「なお悪いわ!」

こんな感じでしばらくギャーギャーと問答していた二人だが陽射しの魔力には勝てず、結局二人仲良くすやすやと眠りについた。

夕方。

「では、行ってまいります。」

ひとしきり準備を済ませ、操者用のピッチリとしたスーツから簡素な服に着替えたウェインが不落壁の門に一礼する。

門の上には、同僚達が男女問わず大挙して見送りに来ていた。

「元気だな!」

「貴重な女の子成分があ……」

「なんか土産頼むぜ!」

「俺はエロいの!」

「俺もエロいの!」

「僕も!」

「わちきも!」

「磨も!」

「おいどんも!」

「バカヤロー! 女の子だぞ! ウェインさん、いつてらっしゃい!」

「空気読め!」

「何だとお!?」

ウェインは、苦笑しながらも自分を見送ってくれる仲間の多さに、ただただ感激した。

「ウェイーンッ！」

集団の奥から、聞き慣れた声が響く。

「コバックス!？」

勤務終了から間もないコバックスが、息を切らせながら集団を掻き分ける。

「忘れ物だ、ウェイーン！」

ウェイーンは遥か高くから放り投げられた物を、慌てて受け止めた。

「これは……」

「ブロン・ブロンの中に落ちてたぜ！ 大事な物だろ！」

「……ありがとう、本当にありがとう！」

「いってらっしゃい、ウェイーン！」

「いってきます！」

ウェイーンが嬉しそうに手にしたそれは、白と黒のツートンカラーの仮面。

四年前、シルヴァリスの操者が付けていた仮面と全く同じ物だった。

復讐の始まり（2）

リン・ウエインが市街に向けて歩みを進めていた頃、ケビンとムラマサは夕方になるにも関わらずまだ眠っていた。

「むにやむにや……」

「すう、すう、んっ、んん……」

寝返りをうつてムラマサから離れたケビンをムラマサも寝返りをうつて抱き留める。

こんなふうにお互いを抱きしめあつて寝ていながら、夫婦みただと指摘されると互いに顔を赤めて否定するからおかしなものである。

しかし彼らの安眠を妨げる物があった。

彼らの上空を突如引き裂いて現れたそれは、魔機を爆破しても鳴らないようなものすごい轟音をあげて礼拝堂そばの広場に突撃した。

「……なっ、何だぁ!」

「な、何事!？」

当然、ほぼ爆心地の彼らはこの目茶苦茶な出来事に寝ぼける暇もなく目を覚ました。

「ケビンさん、広場が!」

「ああ、見に行くぞ!」

二人は着の身着のまま外へ走る。

そして、その光景に驚愕した。

「これは……隕石じゃねえか!」

隕石、それも標準的な魔機の半身はありそうな大きさの物が巨大なクレータを作っていた。

「ケビンさん、この場所つてまさか……」

ムラマサの指摘に、ケビンはハッと気がついた。

広場に建てた司祭様の墓がどこにもない。

正確には、隕石から少しずれた場所が衝撃の煽りを受け、墓が『

墓だった場所』になってしまっていた。

「ああつ、司祭様の墓が、墓が粉々になっちまった！」

突然の不条理に呆然と立ち尽くすケビン。

「なんだなんだ？」

「何これ？」

「知らないよ！」

野次馬達も次々と集まってきた。

「ひっ！ ケ、ケビンさん、人が人がいっぱいゴザル！」

ケビンを影に隠れるムラマサ。

しかし、当のケビンはポカンとした顔で隕石を見上げていた。

だが、突然それをキツと睨みつけると、司祭の墓の破片らしき物を握り、隕石にたたき付ける。

「ケビンさん！？」

「隕石め！ 何が何だかわからんが、よくも司祭様の墓を！ 貴様なんぞ、墓石にしてやる！」

ケビンは隕石に破片を押し当て、尖った部分でガリガリと削った。隕石も隕石で、落着の衝撃を耐えた割には簡単に削れていく。

「『バルグ歴七十七から百十二、ドミ・カームここに眠る』……どうだ、ざまあみる！」

「ケビンさん……」

「あん？ ムラマサ、ちつとは空気読め！」

「腰が抜けたのでゴザル……」

「がくがくと脚を震わせるムラマサ。」

「……けっ、まったく。ほら、肩かしてやる」

「かたじけないでゴザル、まだ色々やることができましたよね……？」

「いいよ。こんなクソ隕石よりムラマサの方が大事だ」

「ケビンさん……」

「……観衆の真っ只中でノロケやがって……」

「……そ、そんなんじゃないですね！」

周りの目が厳しくなってきたので、ケ빈はムラマサをしょい込みながらそそくさと礼拝堂に引き上げた。

「まったく、非常識な若者だ」

「幸せな奴らだ」

「私達にもあんな頃がありましたね、ばあさん」

「ええ、じいさん」

「俺も記念に文字を彫ってみよう」

「僕も」

「わても」

「我輩も」

「オラも」

二人がいなくなった途端、野次馬達が好き勝手始めたが、しかし。

「あ、あれ？」

「どうした？」

「こいつ、うんともすんとも言わないや。硬くてまるでダメだ」

「こっちもだ！」

ケ빈が削るのに使った墓石で削ろうと試みた者もいたが、逆に墓石が折れてしまった。

「ええい、刃物屋を呼べ！ いつも『ヤポン刀』とかいう変なのを磨いてる変人だが、役には立つはずだ！」

結局、何をやっても傷一つつける事ができなかったので野次馬はみな帰ってしまった。

少し前。

「な、何だ！ 何の光……？」

少し休息をとっていたウェインもまた、隕石の軌道を目撃した。

「少し、気になりますね。それに、あの方角は四年前の……！ 行けと、いのですか？」

彼女は、ボンヤリとしていた予定が頭の中でスツと組み上がるのを感じた。

「まずは歩きましょう。なあにこんな距離、馬車も魔機も要りはありません！」

次の日。

結局ムラマサと一緒に寝たケ빈は、外の騒がしさに目を覚ました。

「おい、ムラマサ。起きるんだ」

「すう、すう……ふぁ、お、おはようございまふ」

トロンとした目をしながらムラマサが起きる。

「外の様子がおかしい。礼拝なら昨日やったよな？」

「は、はい。今日はケ빈さんは私とお弁当と一緒に作ってお出かけに行きます……」

「おい、お前まだ寝ぼけてるだろ。起きろ起きろ！」

頬をぺしぺしと叩かれて、ムラマサはやっと目に光を宿らせた。

「ハッ！ 拙者は何を……？」

「本当、何だろうね」

「？」

「まあいいや。着替えたら外を見に行くぞ」

「は、はい！」

ケ빈は着替えを済ませ、わたわたと礼拝堂の扉を開ける。

「初めまして、週間バルグのロディだ」

「……は？」

いつになく慌ただしい朝が始まった。

その頃。

「つ、疲れました。お腹すきました。……不落壁に、帰りたい」

ウェインは根をあげて倒れ伏していた。

「ブロン・ブロンが恋しい……」

彼女は、魔機を持ち出すなんて以っての外だと冗談として笑い飛ばしたマクギニスとの会話を思い出し、半日前の自分を殴り飛ばし

たくなった。

マクギニス達も、まさか何の策も無かったとは思ってもいまい。
「せめて馬車だけでも借りていくべきでした……。ああ、あんな所に親衛隊のセル・バンが見えるなんて、いよいよ私は死ぬのですか……」

もしも神がいるならば、助けてくれ。

薄らぐ意識の中、そう祈って少しづつ前進するウェインを救う一つの影。

「おい、アンタ！ 大丈夫か！？」

「……セル・バン？ ああ、幻が話し掛けてくるなんて、私はどうとう気が狂ってしまったのですね」

「ま、幻い？ ったく、偵察の帰還中に変なもの見つけたな……」

彼女は、二回幸運に遭遇した。

一つは、セル・バンの操者が『魔機で市街に進入するのは、民衆を不安にさせる故に例外を除いて禁止とする』という基礎も覚えていないバカヤローだったこと。

もう一つは彼が、困ってる人を見逃せない『正義のバカヤロー』だったことだ。

かくして、九時少し過ぎ。

市民の悲鳴をバックにウェインは無事に市街に到着した。

大変だったのはウェインだけではない。

「ずばり、どんな手品だ！」

「……はあ？」

ケ빈は、礼拝堂を開けてすぐにロディの質問責めにあつた。

「あの隕石にどうやって傷を付けたんだって聞いているんだよ」

「だから、こうガリガリツとだな」

「あんたねえ、そんなんで市民が納得するかよ！？ 何かしたんだろ、言ってみろ！」

さっきからずっとこういう状態が続くいちごっこである。

曰く、隕石に傷を付けたのはケビンだけだ。

曰く、刃物屋が鉄塊すらも細切れにしたヤポン刀を使っても傷は一つもつかなかったのに、ケビンが使ったのは墓石の破片だ。

曰く、なんか胡散臭い。

「あんたは、この隕石騒ぎで何かやらかす気だろう！」

「知るか！ だいたい何だ、胡散臭いて！ 全く関係ないじゃねえか！」

「あんた、四年前の時に恩師を市民に殺されたそうだな」

「！」

「そんな時にあんたが何かしらの感情を抱いても何もおかしくない。そしてその感情は昇華して……」

「おい」

「あん？」

「あまり、聞かれたくないことってあるよな」

「……で？」

「誰にだってあるはずだ。そして、しつこくほじくり返された時、怒ってぶん殴る奴もいるかもしれない」

ロディは、ケビンに下卑た視線を向ける。

「脅す気かよ？ いいのか、俺の後ろにはカメラがいるんだぜ？」

魔石式の頑丈な奴だ、仮に壊そうとしても……」

「いいや殴るなんて滅相もない、俺はけっこう理性があるつもりだ。ただ、このまま好き勝手言われて、もしも俺のタガが外れたら怪我じゃあ済まないかもしれない。痛み分けでも済まないぜ」

「……けっ、つまりどうしろと？」

ケビンは頭を下げて率直に答えた。

「帰ってくれ。それと、俺と隕石は無関係だ。何で削れたかは本当にわからない。……信じてほしい」

ロディは、降参を示すジェスチャーをした。

「わかったよ。こっちだって、あんたみたいになつまない奴にいつまでも付き纏うのも面倒だ。引き上げてやる」

「ありがとう」

ロディは嫌な顔をした後、ニヤリとやらしい笑いを浮かべる。

「俺はな、『一番乗りのロディ』って呼ばれてんだ」

「で？」

「まあ聞けよ、俺以外にもいろんな記者の連中があんたのところに向かってっただぜ。逃げられるもんなら、逃げてみるよ」

「いいのか？」

「他の連中に横取りされるのもアレだしな。第一、近隣の声と珍奇な隕石の写真さえあれば、後は『雑誌向けの編集』でなんとでもなる」

ケ빈は苦笑した。

「それってヤラ……」

「おっと、他の連中がそろそろやって来るぜえ？」

「ちっ。もう来るなよ！」

「また何かあったら行くぜ！ 最後に一つ、聞きたい。」

「……なんだよ？」

「お前ら、付き合ってたの？」

沈黙の後、ケ빈と後ろでおどおど聞いていたムラマサの顔が真っ赤になる。

「……帰れ！」

「ヒヤッヒヤヒヤヒヤ！ おう、達者でな！」

言うや否や、ロディは風のように消えてしまった。

「ケ빈さん、どうします？」

「ああ、地下の裏口から行くぞ。なに、デートみたいなもんと思えばいいさ」

「……そんなことばかり言うから、変な勘違いばかりされるのでゴザル！」

どうやら、この二人の頭に『お互い様』という言葉はないらしい。

街のどこか。

「つまり、見つかったのだな!？」

暗がりの中で二人の人影が相對する。

「ハッ、間違はなく リベンメタル でございます!」

リベンメタル。

それが何かは我々にはまだわからないが、少なくとも報告を受けた女は非常に満足げな顔をした。

「よし、よくやった。早速ジン様をこの地にお呼びして……」

『その必要は無い』

「「!」」

ジン・シラヌイ。

天へと続く道の創始者であるその男は、造作もないといわんがばかりに空間を裂いてやってきた。

『時は、きたようだな』

市街北西部、親衛隊駐屯地。

「リコ! 貴様は、国王陛下に与えられた 銀色 を何だと心得ているかあ!」

格納庫に、男性の怒号がこだまする。

「セル・バン ですか? 強くてかつこよくて、市民の平和を護るためには充分過ぎる程の傑作と、オレは感じました!」

リコと呼ばれた操者は誇らしげに答える。

「そういう問題ではない! 貴様には一般常識を知って貰おうとこの俺、ロジャー・スが国境偵察隊にわざわざ頭を下げて編入させたのに……まさかここまでの馬鹿とは!」

「あはは、はははは……」

「笑うな! セル・バンの肩に付いた金の車輪は、お前がトップエリートである事の証明のはずなのに、通りすぎた子供が『リコの正義バカが帰ってきた』なんて言い出した時は俺はどうしたものかと……」

中年は、気が気でないといった感じに大きなため息をついた。

ウェインとリコは街中で魔機を歩かせたとしてロジャースに引捕らえられて今に至る。

「すみませんね。リコは才能はあるけど、どうにも馬鹿っぽくて、なんであいつが二年前の試験を通ったか、不思議でならない」

「いえ、久しぶりにセル・バンを見る事ができてよかったです。魔力伝達用のシリンダが少し変わっていて、驚きました」

ウェインは背後に格納されたセル・バンに視線を注ぐ。

「やけに詳しいね。……いやまてよ、不落壁所属でその瞳と雪の様な銀色の髪、まさか貴女は！」

「ロジャースさん、どした？」

「馬鹿っ！ この人は我々木っ端の親衛隊が話し掛けるのも憚られた、あのオズワルド卿が……」

「だ、誰かと勘違いしていませんか？ 私は休暇を貰ったただの騎士に過ぎません！」

ロジャースの言葉をウェインが慌てて遮る。

「ふむ？ そうですか、わかりました。……今はそういう事にしておきましょう」

「あ、あはは……」

あくまで『勘違い』を貫くロジャースに、ウェインは苦笑いをした。

「おい、リコ！」

「な、なんでしょう！」

話しからのけ者にされていたリコは、ロジャースに呼ばれて慌てて振り返った。

「この人を案内してやれ！ 貴様はこの辺の地理に強いはずだ！ 練習用のブロンなら使用も許可する！」

「え！ さっきは魔機はダメだって言っただじゃあないですか！ それにあの魔機、装甲厚ばつたいし、色はダサいし……」

「馬鹿野郎！ 例外だ、例外！ それに、いちいち小さな事でブーイングなんてやってて務まる正義かよ！」

「な、馬鹿にしないで下さい！ わかりましたよ、やりますよ！」

「……そういうことですので、心配は無用です。いやあ、あの頃の少女が、大きくなりましたなあ！」

「え、ええっ？」

ウエインは自分の判断無しでどんどん進んでいく状況に啞然としながら、カナリアイエローのブロンにぼうり込まれた。

バルグ王国は、王城を中心に高級住宅街、住宅街と市場、スラム、工業地、内壁、農業地、不落壁、そして原野と国境からなる巨大な円形をしている。

ちなみに、ケビン達の礼拝堂はちょうどスラムと住宅街の間にある。

「た、大変だぁーっ！」

その中心たる王城で、絶叫が響き渡る。

「どうしたっ新入り！」

「姫さまが、第四王女のシレーヌ様がどこにも居ない！」

「……なんだ、またか」

わけを聞いた途端にとてつもなくつまらなそうな顔をした先輩に、新入りは首を傾げる。

「あのなあ、非常事態だぞ！」

そんな新入りに、先輩は突然全く関係なさそうな話題をふった。

「お前は、モジャヒゲという家畜を知ってるか？」

「えっ？ ……知ってるよ。一ヶ月に一度、雄雌問わずいきなり髭がブワツと伸びるんだろ」

「実はあれは、モジャヒゲが新しい発見をした時の驚きが、一ヶ月周期でぶりかえすのが原因なんだとか」

「ああ、確かモジャヒゲの髭は探求の象徴とかで試験のお守りにも……って、それがなんだ！ 状況を考えろ！」

「姫さまのコレはな、モジャヒゲの髭なんだ」

「……は？」

呆然と立ち尽くす新入り、無理はない。

「つまり、あの人はなにか自分の興味を引いたものに関しては、無類の力を発揮するのさ。ほら、机に『市場に面白い靴が入ったそうですね』って」

新入りは、自分が国学を教える時の彼女の眠そうな顔を思い浮かべ、それから彼女が監視を振り切っても靴を探しにいく姿を想像し、その落差に戦慄した。

「というか、『そうですね』って、他人ごとなのね」

「そんな人だ」

「とにかく、探しに行くぞ」

「まあな」

二人してため息をつく。

「何事かね？」

そこに、威厳を感じさせる大男が顔を見せた。

異界獣が遠因とは言え、一代で大陸間の全ての国家から大規模な争いを取り払った賢王、バルグ四世その人である。

「こ、国王様！」

新入りも先輩も地に伏して礼するが、先輩が新入りに小声で話し掛ける。

「髭って言ったことばれてなきやいいが……」

「冗談じゃない！ ばれたら俺達みな殺しだ……」

「ところで」

「は、はいっ！」

二人して竦み上がる。

「娘の事を『モジャヒゲの髭』と言ったのは、どちらかな？」

「も、もうおしまいだ……！」

「……仕方ない、正直に白状しよう」

震え上がる新入りの隣で、先輩が意を決して立ち上がる。

「私でございます！」

その目には人生全てを放り出したある種の潔さがあつた。

「面白い、実に！」

「……へっ？」

先輩と、続いて立ち上がった新入りは顔を見合わせ啞然とした。
「いやあ、確かにあいつは、紛れもなく知識欲の塊だ！　しかし、あのシレーヌが髭の代わりにモジャヒゲから生えてくる図を想像したら、フッフ、ハッハハハハハ！」

賢王は、とても自分の娘が変な比喻をされた親とは思えないくらい大笑いして、先輩を見る。

「なかなか、面白い男だ。名前は！」

「はっ、セйм・ファイでございます！」

「給料を上げるよう掛け合ってやろう！　では私はこれで。娘を頼むぞ！」

賢王はそういつて、自分の部屋がある塔への道を歩きだした。

「い、行っちゃった」

「なあ」

「ん？」

「今まで姫さまの傍で仕えてきたが、あの人を見るとなんで姫さまが『姫さま』か、わかる気がする……」

「た、確かに……」

二人は、嵐の様に去っていった賢王をただただ見つめた。

その頃、住宅街を駆ける人影がいた。

工場勤めの女の子といった感じの服を着て自転車に乗ったその人影は、第四王女シレーヌ……もといモジャヒゲの髭である。

（フッフ、確かに私は靴を探しに行く予定でした。しかし、昨日口デイさんに聞いた限りではスラム付近に落ちた光は　隕石　だそうですね。これは、興味を引かないわけがありません！）

眼を半開きにした実に眠そうな顔で不敵に笑ったモジャヒゲの髭は、自転車を漕ぐ脚に力を入れた。

さて、騒動の中心たるケビンとムラマサは、何とか記者を撒いたものの、住宅街の広場まで来てしまった。

「さて、どうする？」

「お腹すいたでゴザル」

ムラマサとケビンの腹から音が鳴る。

「朝、食ってないしなあ……」

「でも、お金無いでゴザルよ？」

「そうだよなあ……」

ケビンは、参ったとばかりに頭をかいた。

「見つけましたよ……」

その後ろから迫りくる人影。

「バルグ・ウィークスです、ぜひ一言！」

「こつちが先だ、馬鹿！……日刊『女性と健康』です。ケビンさん、隕石って何で落ちたのかご意見ありますか？」

「司祭の墓に落ちたのは何故ですか？」

「何とか言えや！」

瞬く間に記者に道を塞がれる。

「あわわわ……ケビンさあん！」

人の波にムラマサが吞まれた。

「嫌あつ、助けて下さい！」

「ムラマサ！」

ケビンの脳裏に四年前の記憶、人に吞まれてぼろ雑巾同然になった司祭の亡きながらフラッシュバックする。

「貴様ら！ 貴様らがあつ！」

ケビンはムラマサまで続く軌道上の記者を思いっきり殴り飛ばした。

「うわっ、今のはカメラ回したな！ 暴力を振ってきたぞ！」

「報道の自由に盾突く愚民め！ 今の行いを好き放題編集してやる！」

「うるせえ、ムラマサを返せ！」

通りが大混乱になったその時。

「神聖なる王国で何をしているか、馬鹿者共め！」

広場一帯に響く声。

声の主は、親衛隊の紋章が腕に彫られたカナリアイエローの魔機
ブロン であつた。

「とつととその人達を解放しろ！」

「ひいつ、職権乱用だ！」

「キサマらが言えた事か！ 正義の名の元に、引つ捕らえてやる！」
相手が魔機、それも親衛隊では分が悪いが、記者達は蜘蛛の子を
散らす様に引き上げていった。

「ムラマサ！」

「ケビンさん！」

ケビンはムラマサに飛びつき、強く抱きしめた。

「怪我は無いな！？ 無いよな、おい！」

「は、はい」

「よかった、よかった……」

「ケ、ケビンさん？」

ムラマサは、自らに体を委ね子供みたいに泣き出したケビンに狼
狽したが、すぐに彼を抱き返した。

「あのー、感動の再会はいいけど。その、なんだ、あれだ。……よ
そでやれ！」

「「あつ」

そしてすぐに魔機の操者に気づき、二人して本日二度目の赤面を
した。

「はあ。とりあえず、飯でも喰おうぜ？ ウチのお客さんも腹減ら
せて待つてるしな」

「そ、そうだな！」

「ま、まずはご飯を食べましょう！ 私もケビンさんも疲れまし
たから」

「ムラマサ、拙者とゴザル」

「あっ！」

「ったく、ははは……」

「いやあ、ふふふ……」

「……なんなのアイツら、腹立つんだけど」

甘ったるい雰囲気の中で、魔機の操者、つまりリコは彼らを助けた事をものすごく後悔した。

食堂。

「いやあ、食った食った」

「お腹いっぱいゴザル！」

「そいつはよかった……じゃねえよ！ オレの財布を何だと思ってやがる！」

満足げに腹をさするケビン達と明らかに不服げなリコ。

「悪い悪い。何から何まですまないね」

「拙者、貴方みたいな優しい人はケビンさん以外見たことが無いのでゴザル」

悪びれもせずに言うケビン達に辟易しながら、リコはウェインに視線を移す。

「ウェインさん、このアホ共に何とか言ってやってくれよ……ウェインさん！」

「わ、私ですか？ っとと、うわあっ！」

ウェインは、自分に話題が回るとは思いもしなかったのか、驚いた拍子に長椅子から転がり落ちてしまった。

「おい、ウェインさん！」

「大丈夫か？」

ケビンがすぐさま手を差し延べる。

「！……はい、大丈夫です」

「怪我とかありません？」

「大丈夫ですから！」

ウェインは、彼の手を払いのけて立ち上がる。

「あ……ご、ごめんなさい」

そして、ハツと我に返った様な表情になると、申し訳なさ気に俯いた。

「ウェインさん、アンタさっきからおかしいよ！ ポケットとしてたかと思つてたら、いきなり恐い顔してさ」

リコはケビンを睨みつける。

「思うに、アンタに会ってからなんだよ。知り合いかよ、アンタ」
ケビンは、記憶の彼方からウェインを引きずりだそうとしたが、結局わからなかった。

「いや、初対面だと思うけど。ただ……」

彼はウェインにグイッと近づく。

「その目。どつかで見たような？」

「……気のせいです」

「ふーん」

疑わしい目でウェインを凝視するケビンをムラマサが引きはがす。
「ケビンさん、人にはあんまり言いたくない事なんてたくさんあるでゴザル！ 拙者だっているいろいろあるし……」

「わかったよ、この話題はやめだ」

ケビンは疑わしげな顔を崩さぬまま引き下がる。

「で、アンタ達は何で追われていたのさ？」

リコの質問に、ケビンは先程を思い出したか少し嫌な顔をする。

「あー、簡単に言つと、家に隕石が落ちたわけだ、それで何か知っていること話せて。冗談じゃないよ、俺が知りたいくらいなのにさ」

「ふうん。まあ、その隕石ってどんなだったか詳しく……」

「詳しく教えていただけますか？」

リコの台詞は別の人物に遮られた。

白磁のような肌を際立たせる黒いシャツにカーキのツナギ、ボサボサの金髪頭にはちょこんとハンチングを被せた女の子。

シレーヌ、もといモジャヒゲの髭である。

「……どちら様ですか？」

当然いきさつも彼女の立場も知る由の無い四人からすればわけがわからない。

「ああ、失礼。見ての通り、通りすがりの女工です」

幾度と無く脱走を繰り返してきた少女の変装は完璧で、確かに傍からみたら女工そのものである。

「工場に帰れ」

「あつ！ いいじゃないですか、私だって気になるのです！」

しかし、さつきから野次馬に辟易していたケビンに冷たくあしらわれる。

「ケビンさん、今さら女の子の一人や二人、拙者は構わないでゴザル」

ムラマサに言われて、ケビンは仕方なさそうな顔で了承した。

さつきの態度だって、半分は極度の人見知りのムラマサへの配慮だ。

「わかったわかった、聞かせてやつからこっち座れ」

「まあ、ありがとうございます！」

少女は長椅子の端に腰掛ける。

「つまり、事の次第は昨日の夜に遡る」

ケビンは、昨日の出来事をかい摘まんで話した。

「……というわけで、今俺は野次馬その他諸々に追われているわけだ。……なんだ、その顔は」

話を聴き終わった三人は、やけに嫌そうな顔をしていた。

「いや、つまり、あなた方は昨日のお昼頃からずっと……コホン、ちちくりあっていたわけですね」

「アンタら、さすがにオレでも引くわ」

「下々の私生活って、不潔なのね。うえっ……」

「な、ちちくりあうとは何でゴザルか！ 拙者達は今までこれからもとっても清い関係でゴザルっ！」

ムラマサは、ケビンにピタリと身を寄せながら反論した。

「『説得力、無いです』」

三人揃って否定する。

「……多少論点はズレたが、つまりこの隕石、君達はどう思う？」
ケ빈はズレた話題を無理矢理に軌道修正した。

「そうだな、今のところ情報が少な過ぎて、オレには何ともわからない。親衛隊の資料にもらしい話は無かったし」

「私もサッパリです。すみません、力になれなくて」

「そうね……それっぽい物を今思い出したわ」

リコとウェインが口を濁す中、少女が何かを掴んだようだ。

「ただ、神話の中のお話だからあてにはならないけど……。」

「構わない、教えてくれ」

「ええ。貴方も司祭なら、六神神話は知っているでしょう？」

「ああ」

「六神の内、機械と金属の神　ハイブメト　のお話なんだけれどね」
少女が、語る。

曰く、人々に金属を提供して、機械を捧げられて暮らしていたハイブメトは、人々の更なる助けになろうと、新たに金属を創った。

その名も、リベンメタル。

人々の明確で強い意志に反応して加工され、現存する全ての物質の上を行く硬さを誇り、人々の助けになったリベンメタルだが、一人の男の強い意志で災いをもたらした。

その意志は　殺意　。

それ以外でも、　怒り、　悲しみ、　恨み、　嫉妬　といった、マイナスの力で加工されたリベンメタルとその被害に悩まされたハイブメト。

結局、彼は全てのリベンメタルを人々から取り上げて空高くへ放り上げてしまった……。

「つてわけよ」

少女は語り終えた。

「なるほど、『強すぎる想いは人に害をなす』という戒めにもとれますね」

ウェインが応じる。

「私も、ケビンさん……でしたっけ？ 貴方の話を聞くまではそうだと思っていたのだけれどね」

「……仮に礼拝堂に落ちてきた隕石がリベンメタルだとしたら、俺の強い怒りで削れたというわけになるんだな？」

昨日を詳しく思い出すケビン。

確かに彼は『怒りに任せて』墓石をたたき付けた。

「おいおい、神話の世界に迷い込んだのかよオレ達」

リコは、状況にただただ呆れ返るばかりであった。

「ただ、問題があるわ」

「……！ 神話通りなら、悪用される危険は高いでゴザルな」

「ご明察。特に 天へと続く道、連中は何しでかすかわかんないのよ。最悪、この日を待っていたのかも知れないし」

頭を悩ます少女にリコが提案する。

「だったらさ、国王に直談判して止めればいいじゃないか」

「あなた、馬鹿でしょう？ 証拠もないのに、何て言うの？ 『連

中は、神話の最強の金属を狙っているんです！』とでも言うつもり

？」

「だあつ！ くそつ、どうせオレは馬鹿だよ、馬鹿の鏡です！」

自分を全否定されていじけるリコの隣で、彼を馬鹿にした少女が閃いた。

「……いや、そうね。ようするにリベンメタルを王宮に運んじやえ
ばいいのよー！」

「なるほど、王宮にはさすがに 天へと続く道 も手が出せません
ね」

ウェインは少女の言いたいことを悟った。

「だが、どうするでゴザルか？ 王宮まで運んでも、この面子では

突っぱねられて終わりでゴザル」

司祭、司祭の見習い、騎士に女工。

確かに説得力がない。

「それなら、オレは下っ端とは言え国王親衛隊だぜ！」

「下っ端なら余計に無理でゴザル」

「なんでだよ！」

「例えば、『金を握らされて懐柔された』、『家族を人質に取られた』、『洗脳された』など、中途半端に情報を知っていたり、立場がある者ほど利用される、あるいはそれを疑われるものでゴザル」

「ちえつ。にしてもアンタ、詳しいな……」

リコは、自分の力不足を痛感してうなだれた。

「どうしたものでしょうか……」

「去年の第二王子結婚式の時にもっと王様に媚びるべきだったかな？」

ウェイモンもケビンも打開策が浮かばない。

「はあ、仕方ないわね……」

少女がため息をつく。

「こうなったら奥の手よ！ これを見なさい！」

彼女がツナギから取り出したそれは、王族関係者を表す印が刻まれたペンダントであった。

「へえ……」

「あら！」

「なるほど、でゴザル」

「こいつは……」

それを凝視する四人。

「フフン、どうよ！」

誇らしげな少女。

「よく出来た偽物だなあ」

「いや、盗品かもしれません」

「あの子、ああ見えて王族を殺して奪うなんて残酷な事をしたかも

知れぬでゴザル」

「なんにせよ、大したヤツだ!」

四人は好き勝手言いはじめた。

「違あう! 贋作でもなければ盗品でもない! 私はシレーヌ、この国の第四王女なのよっ!」

「どこの国にツナギ着て髪の毛サつかせた王女がいるんだよ」

「嘘ならもつとマシな嘘をつきなさい?」

「いや、本気で信じてる可哀相な子かも知れぬでゴザル」

「なんにせよ、大したヤツだ!」

四人の視線が冷たい。

「もう、何なのよ! 人がせつかく力になるって言うてるのに!」

「悪かったよ、すまんすまん」

「ごめんなさい、貴女何だか弄りがいがあって……」

「悪気は、ある方でゴザルよ?」

「ははははは」

四人それぞれ、謝ってるのか違うのかかわかりがたい詫びを入れた。

「もう知らない! 私帰る!」

少女は不機嫌そうに頬を膨らませた。

「それはちょうどいい」

「城に帰ってもらいますよ、シレーヌ様」

突然後ろから声がかかり、全員が身構え、少女が絶望の混じった素っ頓狂な声をあげる。

「げっ! シンとセイム!」

「まったく、人騒がせなんだから」

「リベンメタルだか何だか知らないけれど、他人に迷惑かけてばかりはいけません。さあ、物理、数学、国学、歴史の宿題は終わりましたか?」

シンとセイムと呼ばれた男達は二人がかりで、抵抗する少女を抱え上げる。

「嫌! 私は真実を知りたいの! せつかくロディさんに教えても

らったのにい！」

「問答無用！ 行きますよ！」

「いやあ、皆さん。ウチの『モジャヒゲの髭』がお世話になりました。ではー」

少女はスーツ姿の男性二人に引きずられていつてしまった。

「な、なんだったんだ？」

「さあ、私にはなんとも……」

ケビンとウェインは顔を合わせて首を傾げる。

「しかし、やっぱり君どこかで……」

「気のせいですってば！」

「ケビンさん！」

「アンタなあ！」

さっきの話を蒸し返そうとしたケビンは、三人に凄まじく引き下がったが、再び口を開いた。

「しかし、これからどうする？ 一応俺はムラマサと帰って様子を見るつもりだが」

「私はひとまず持ち場に帰ることにします。 天へと続く道 が怪しい以上、守りは固めておかなければ」

ウェインは不落壁の方角を見つめながら答えた。

「……いいのかよ、アンタ。せつかくの休暇なんだろう？」

「構いません。お土産も買いましたから、ほら」

「ほら、じゃないよ！ 十五歳に何て卑猥なもん見せてんだ！」

カバンに詰まった 卑猥なもん から顔を赤めて離れるリコ。

「まあ、そんなこんなだからオレはこの人を送るよ。何か縁があったら、また会おうぜ！」

「ああ、またな」

「今日の事は本当に感謝してるでゴザル。実は拙者、極度の人見知りで……」

「いいって、気にすんな。正義の味方には当然の行いさ！ ……さすがに目の前でちくりあわれるのは勘弁な」

「「あはは……」」

広場での出来事を思い出し、ケビンとムラマサは乾いた笑いをした。

「じゃあな、アンタら！」

「さようなら」

「ああ、さよなら」

「縁があつたら、でゴザルな！」

そして彼らは、一同に会した広場で別れを告げ、それぞれの目的地に向かう。

「さすがに記者どもはいないよな……」

ケビンは、視線を泳がせながらムラマサとの距離を詰めた。

「ハハハ、ケビンさんは神経質でゴザルな。」

「お前が心配だからな、次はちゃんとお前を守らせてくれよ」

「ケビンさん……！」

また二人して往来には毒な甘つたるい空気を振りまいていたが、ムラマサは彼方に王城へ向かう一つの人影を見ると、目の色を変えて飛び出した。

「ムラマサ！？」

「失礼、すぐに戻るのでゴザル！」

「おいつムラマサ！ くそっ！ なんて速さだ、本当にムラマサかよ、あいつ……」

ケビンも慌てて追いかけるが、彼女との距離は縮むどころかますます遠ざかる。

「ムラマサ、おい、ムラマサあつ！」

「見つけた、見つけたぞ！ 不知火・刃！」

親衛隊北西駐屯地。

帰還用に手配されたりコのセル・バンの前で、ウェインがロジャースに別れの挨拶をしていた。

「では、お帰りになるんですね？」

「はい、何から何までお世話になり、ありがとうございました」

「いやいや、構いませんよ！　ところで、オズワルド卿はお元気ですか？」

オズワルド。

その名前が出た途端、ウェインの顔が曇る。

「……何か、あったのですね？」

「我が師は、オズワルド卿は……四年前に手紙を残して、行方をくらましてしまいました」

「それは、嫌な事を聞いてしまいました。失礼」

「いえ、大丈夫です。……そろそろ、行かなくては。リコが待っています」

「それでは、お元気で」

「はい！」

ウェインは一礼すると、リコのセル・バンに乗り込んだ。

「……大きくなったものだ。俺が会った時はまだ十歳ですら無かったなあ」

ロジャースは、徐々に遠ざかるセル・バンを見送りながら感慨深げにため息をついた。

「なあ、ウェインさん」

「なんですか、リコ」

狭い操者槽の中で、リコが立ち乗りしているウェインを見上げた。

「さつき話してた、オズワルドってどんな人だ？」

「そうですね……。強く、誠実で、覇気に溢れた人でした。私はいつも師にしごかれて、おかげで親衛隊の一員になれた、はずなのに……」

「わ、泣くなよ、ウェインさん！」

急に涙を流したウェインと、それに慌てるリコ。

「いろいろ訳ありなら、これ以上はいいよ」

「いえ、大丈夫です。……ゴールドーを知っていますか、リコ」

「誰も乗れない最強の魔機、だろ？ 魔機乗りで知らないヤツはいないよ」

「オズワルド卿は、あれの操者をつとめていました」

「！……化け物かよ、その人は」

「ゴールドー。」

稲妻と嵐を纏い、戦場を駆け抜けたと言われるその黄金色の魔機は、並の操者が乗ればたちまち命を奪う、常識外存在であった。

「師は、ゴールドーと共に常勝不敗を貫きましたが、たった一つの存在に最後まで勝てませんでした」

「……？」

「時間、です。」

「なるほど、老化か……」

「はい。いかに師が強かろうと寄る年波には勝てず、ゴールドーに連続して乗れる時間も一日から十二時間、そして三時間、一時間、十五分……私が弟子入りした時には既に五分乗れば御の字、というくらいまでに衰弱なさっていました」

ウェインは、己の体に鞭を打って毎日彼女を鍛え上げたオズワルド卿のシワの深い顔と大きな背中を思い出しつつ、そんな彼を裏切るように不落壁に逃げ込んだ自分に激しい嫌悪感を感じた。

「じゃあ、オズワルドって人がいない今はゴールドーはどこにあるんだ？」

「王城の地下のどこかに他の魔機と共に安置されていると聞きました」

「そうか。……おつ、見えてきたぜ、不落壁の門」

眼前に広がる広大な壁。

そこに入るための門が、少しずつ彼らの視界を埋めていく。

「……感謝していますよ、リコ」

「へへっ、毎度あり」

その頃ロジャースは、格納庫の ブロン の整備パネルに魔石を

差し込み、ブロンから不自然に厚ぼったい装甲を次々と剥ぎ取っていた。

「ゴルドー。お前の主は行方をくらませたそうだ」

彼の眼前には、カナリアイエローの装甲をパージし終え黄金に輝く魔機がそびえ立っていた。

「私は、心が無いお前が羨ましい。……もう疲れたよ。いつまであの人を待てばよいのだ？」

ロジャースは、手に持った集合写真、その中央の長髪の男性を見つめて深いため息をつく。

「たった今だ、ロジャース！」

「!？」

ロジャースは、若い男の声に慌てて振り返る。

「貴様、何者か！」

「信じるか信じないかは貴様の自由だが……オズワルドだ！」

写真に写っていた長髪の男性の面影を残した青年は、ロジャースの延髄に鞘をたたき付けた。

「かつ……」

「すまないな、ロジャース。しばらく眠っていてくれたまえ」

オズワルドを名乗った青年は整備パネルを使ってリミッターを外して、ゴルドーに近づく。

ゴルドーもまた、青年が近づけば近づく程その輝きが増していく。

「ヒヤハハハ……さすがだ、ゴルドー！ お前はこうでなくっちゃあ！ では始めよう、新たな世界への第一歩を！」

青年のその目は、ロジャースの持っていた集合写真に写っていたオズワルドと同様に常に戦いを追い求める人間の、極めて暴力的な光が宿っていた。

復讐の始まり（3）

オズワルドを名乗り黄金魔機、 ゴルドー を強奪した青年は、遙か昔から使ってきた物に対するような無意識的な拳動でその起動を完了させた。

「……各部以上無し。フム、さすがだロジャース」

青年は惚れ惚れした様に静かに喜んだ。

リミッターを付けたとは言え、オズワルド以外がゴルドーを動かすには高い集中力と魔力を必要とする。

そんなゴルドーに定期的に慣熟運動をさせた跡が確認できるのは、ロジャースがオズワルドを真摯に待ち続けた証拠であり、彼が日頃の鍛練を欠かさなかった事を意味する。

「これからも、よき騎士でいろよ、ロジャース」

「ふふふ、ありがたきお言葉でございます」

「っ！」

背後からかかった声と駆動音に振り返った先には、頭部についた金細工のシャークマウスが目を引く銀色の魔機、セル・バン が立っていた。

「ロジャース」

ゴルドーが、背後のセル・バンに剣を向ける。

「何の用だ。止めるつもりならば……」

「もしも、仮にもしもあのオズワルド卿であるならば……いや、リミッター無しでゴルドーを動かしたのです。閣下でないはずがありません！ 私めに、これから貴方様の行いを手伝い、見届ける機会をいただきます！」

「……行くも下がるも、地獄だが？」

「十五年前、閣下に命を救われてからこの命、国王ではなく閣下の為にあります。私は、閣下の為ならばそれを捨てることもいとわぬ覚悟にございます！」

「……フツ、お前はそういう奴だったな」

青年、いやオズワルドは、微笑すると、ゴールドで手招きして自らの方に来るようジェスチャーした。

「ついて来い！ 目標は不落壁、北部ブロックの一番から十二番ゲート。遅れるな！」

「ハッ！ 閣下の、仰せのままに！」

黄金色と白銀色の魔機が、まるで二つで一つであるかのように動きを崩さずに夕方の街を駆け抜ける。

それは、互いに心から敬服し、そして信頼しているからこそ為せる動きであつた。

不落壁、西部ブロック。

リコのセル・バンは、無事に滑走路に着地した。

そして、それを監視すべく多くの騎士が数人用の見張りやぐらに集まつた。

「なんだ!？」

「親衛隊？」

「いったい、何の用があるんだ!？」

事情を知らない不落壁側からすれば、日頃仲の悪い親衛隊の銀色が来たという事実には身構えるのは無理もない。

「どうします、ウェインさん」

「私が出ます。君では色々ややこしくなるかもしれません」

「さいで」

不安げに見上げるリコを制止し、ウェインが魔機のハッチを開ける。

「皆さん、ただ今帰りました！」

「「ウェインちゃん!？」」「」」

「なんで、ウェインちゃんが親衛隊の銀色から!？」

「さては、何か悪い事をされたかも……」

「洗脳だつて!？」

「何い！？ オラア、銀色の操者、出てこい！」

待ち人が因縁深い親衛隊の魔機からひょっこり顔を出すという急な出来事に、やぐらに集まった連中がさらにやかましくなる。

押し出されて落っこちた本来のやぐら番が、その様子を見て慌てて叫ぶ。

「わあ、あんまり集まるな！ こいつは結構、年代物で……うわっ、ひびが入った！」

「なにっ、崩れるぞ！」

「逃げるおおお！」

ガラガラと音を立てて崩れるやぐらから、騎士達の絶叫や怒号が響く。

「……すみません、どの道ややこしいみたいです」
「さいで」

自分に振り返って頭を下げるウェインに、リコはため息をついた。
「おや？ ……ハハハハハ！ 皆、どうもウチのブロックに親衛隊の方が何故かやって来て、しかも休暇を満喫しているはずのウェインも乗っていたらしい」

ちょうど各ブロックの隊長との連絡会だったマクギニス隊長は、外で起きた風景を眺めて、楽しそうに他三人に語りかけた。

「ハハハ！ そりゃあ、面白い。ひょっとしたら、あんたに『娘さんを下さい！』なあんて行ってきたりしてな！」

「『済まないが、娘は私の物だ、実は性的にも』ってな、ガハハハ！」

東部ブロックのニックス隊長の冗談に南部のヤシ隊長も応じる。

「……お前ら、騎士ウェインはマクギニスの娘じゃない。それに連絡会で猥談はやめると、何度言ったら覚えるか！」

「「いやあ、すまんすまん」」

苦言を呈した北部のオーカス隊長に仲良く応じる隊長二人。

「まったく……。ん、マクギニスよ、こちらにも二機突っ込んでくるぞ。う、うわあっ！ この識別はオズワルドの、ゴールド」

北部隊長の突然の断末魔は、爆音で掻き消えて聞こえなくなった。マクギニスは、素早く魔石式通信機の発信先を外部に切り替えた。「……敵襲！ 待機中の騎士は、速やかに ブロン・ブロン で備えろ！ 私も ブロン・ドウ が出る！」

事態は不明だが、やることは一つ。

不落壁を襲った愚か者を完膚なきまでに叩くことだ。

その頃。

ケ빈はムラマサを追っていく内に、とある場所にたどり着いた。

「……城、だよな。なんだ、この状況？」

そこは、バルグ国の中心である王城。

しかし、守りを固めるべき番兵も、王族や大臣につきっきりの使用人も、等しく全員が首、左胸、頭などの急所から血を流して倒れていた。

「ムラマサ……じゃないな。あいつは人混みの次に血しぶきが苦手だし、第一、死んでから少し時間が経っている」

ケ빈は、できるだけ彼らを見ないように前進する。血を見るのが苦手なのは、彼も同じである。

「ダメだな、気分悪くなってきた」

急な事態に頭が混乱していたからか、彼は重大な事実の理解に少し時間を必要とした。

「……ムラマサと、あとの姫さん、確かシレーヌ！ あいつらが危ない！」

走り出したケ빈だが、部屋を抜け、広場を抜けを繰り返す中でなお広がる大量の死体に自分を重ね、身震いして立ち止まった。

（俺もこうならない保証なんて無いんだ……）

ケ빈は、彼の心のどこかで勇気を司っている部分が、しゅるしゅると萎えていくのを実感した。

「……おい、あんた」

「！」

そんなケビンの視界の隅で何かが動き、彼に声をかけた。

「あんたは、姫さんをさらってった人！」

「ああ、いかにも俺がそうだ。なんであんたはここに、ゲホッ……ここにいるんだ？」

ケビンの記憶の限りではセイムと呼ばれていたその男の体は、腰を境目に綺麗に割断されていた。

「詳しくは、長くなる。そっちは誰にやられた！？」

「わからない、ただ複数人はいたはずで、俺達をやったのは、一人の男だ。姫さまを連れて城に戻ったら、城門の方から叫び声がして、ケホ、ケホ……姫さまを新入りに任せて様子を見に行ったら、ケホッ！……このざまだ」

言葉を紡ぐたびに口から出る出血、恐らく長くはない。

「姫さんは、どこにやった！」

「おそらく、地下のシエルターだが、俺達をやった連中も、コホ、コホ、そっちに行った。あと、あんたの連れさんも向かったぜ」

セイムは言い終わると一際大きな咳をした。

目の焦点があっていない。

「わかった。クソ、力になれなくてすまない」

「いいんだ、あんたが立ち止まったのも、きっと天の配剤。ケホッ、ケホケホ……姫さまを、頼む。彼女は、知リたがりだが、こんな事は知っちゃいけない、見ちゃ、いけない。……畜生、給料あがったのに、田舎の母さん、楽にさせて、隣に、引っ越して来た、かわいい子を、ナンパして、そしたら……」

「おい？……くそっ、くそっ！」

セイムは、生涯で成し遂げたかった事、人としてごく平凡でささやかな望みすら最後まで言い切れずに事切れた。

「地下のシエルターだな。任せろ、彼女には俺と六神の加護がついてるぜ。何たって司祭だからな。……あばよ、来世は幸せにな」

ケビンはセイムに手を合わせ頭を下げると、脇目も振らずに走り出した。

「ムラマサ、姫さん、俺が来る前に死ぬんじゃないぞ！」

不落壁、北部ブロック。

「コホ、コホ……！？ 誰か、誰か生存者は！」

瓦礫の頂点、隊長室にあたる箇所からオーカス隊長が顔を出す。

「隊長！」

「おおつ、ロッツか！」

オーカスに走り寄る三機の魔機。

純白の体に紺の右腕、北部監視隊カラーのブロン・ブロンである。

「ロッツ、被害報告！」

「ハッ、各ゲートは崩落、通行は不可能とされます。自分とギヤラクとメイスン以外は、瓦礫に巻き込まれて全滅したかと……」

「くそつ、そうか……。私のブロン・ドウは！」

「ギヤラクが持ってきています！」

ギヤラクのブロン・ブロン of 巨大な紺色の右腕は、ブロン・ドウを軽々と吊るし上げていた。

「でかした！ 地獄に六神 ということわざは、こういう時に使うのか」

オーカスは、自身の長年の相棒にワイヤーを使って登頂し、操者槽に乗り込んだ。

「ロッツ。私には外敵が、あの 黄金魔機 に見えたが」

「間違いありません。十時の方向にセル・バン一機を連れて浮遊しています」

「……なるほど。こちらを觀察している様にも見えるな。ナメおつてからに」

北部監視隊、総勢九十七の魔機が全滅、残存戦力は四機。

おまけに襲撃をかけて来たのは伝説の 黄金魔機 。

悪い冗談にしか思えない状況であり、そんな冗談の類いが大嫌いなオーカスは悪態をつきながらブロン・ドウを起動させる。

同時に、ゴルドーが魔力回線をオープンにした。

「かかってこい」

「……なに？」

ゴルドーに乗っている若い操者の、そのシンプルな挑発に耳を疑う。

「せっかく待ってやったのに、わからん奴だな。かかってこいと言ったのだ、オーカス！」

「フン。オーカス！ だとお？ どんな手品でゴルドーに乗っているかは知らないが、オズワルドはともかく貴様のような若造に呼び捨てされる覚えはない！」

オーカスは、口から血の泡を飛ばしながらゴルドーを睨みつける。
「物分かりの悪いのは昔から変わらないな、オーカス。……もしかして、こいつが怖いのか？ 何なら、かわいい部下を引き連れての四機がかりでもいいんだぜ？」

「貴様あ！」

「隊長！」

魔力を脚の辺りに集中させたオーカスのブロン・ドウをロツツのブロン・ブロンが抑える。

「離せ、私がこんな若造に！ いいようにされて！」

「ここは我々に任せて、隊長は早く王城に連絡を！」

「しかし、ロツツ！」

「ブロン・ブロンよりもブロン・ドウの方が速度は上です！ 我々も五秒は稼ぎます！」

「貴様ら……」

オーカスは、感極まって涙ぐんだ。

「……ああ、オーカス。非常に申し訳無いが貴様らに逃げ場など、ない。見たまえ、バルグ王城の姿を！」

魔力を球体状の頭部に集中させたオーカス他三名は、その状況に驚愕した。

「隊長！」

「こ、これは……城が、城が闇に覆われている！」

王城は夕焼けの中でも見て取れる程にどす黒い闇で包まれ、闇も

少しずつ拡大を続けていた。

城だけではない、街の至る所に闇は現れ、中から漆黒の魔機が踊り出る。

「正解だ！ 御褒美にプレゼントをくれてやろう！」

ゴルドーは、どこからともなくブロン・ブロンの右腕をブロン・ドウに放り投げた。

「た、隊長！ メイスンとギャラクが！」

ロツツの叫びに反応してオーカスが振り返ると、メイスンとギャラクのブロン・ブロンの白い細身に幾筋もの軌道が通っていた。

ギャラクのブロン・ブロンに至っては、特徴である不格好に巨大な右腕すら見当たらない。

「なっ！ ……まさか、本当にオズワルドとでも言う気か！」

「そうでなければ、ここにはいない！」

全身を輝かせたゴルドーが、手の平に微細な穴が空いた左腕を振り上げる。

それと同時にブロン・ブロンを包む軌道は切り口となり、なぞるように機体から手足が削げ落ちていく。

「メイスン！ ギャラク！」

推進力を失ったブロン・ブロン二機の操者槽は、不落壁上空から地表へ真つ逆さまに落ちていき、落着いて粉々になった。

「私を前に逃げの一手を打った罰だ、オーカス！ かかってこい、フルパワーを出したゴルドーの慣らし運転はまだ終わっていない！」

「慣らし運転……慣らし運転だとお！？ よくも、オズワルドめ！」

オーカスは、怒りに任せて魔力をブロン・ドウに注ぎ込んだ。

ブロン・ドウを先程のゴルドーのように光が覆う。

「ほう？ ロジャース、見る。オーカスは銀色でもない魔機で 魔力解放 をするつもりだ！」

「この力、風でございますね」

ブロン・ドウを中心に、暴風と言っても差し支えない風が瓦礫や木々、部下の亡きがらが入った魔機の残骸を巻き上げて辺りを覆う。

しかしブロン・ドウは、オーカスが風を強めれば強める程に機体にひびをいれていく。

オーカスもまた、己の体中からおびただしい血が流れて行くのを肌で感じた。

「ハア……やめておけ、オーカス。魔力解放にそんな様子では一分持たん」

言われるまでも無く、オーカスは知っている。

自分とオズワルドの撤回できない力量差を。

ブロン・ドウでゴルドーに勝てる道理など、かけらもない事を。

第一、魔力解放に耐えるには自身も魔機も年を経すぎた事を。

「ならば、ならばせめて一分！ 貴様を目一杯不愉快にさせてやる！」

「フツ、ヒヤハハハハ！ できるならばさせてくれよ、オオオカス！」

「今の内にロツツは離れる！ 銀色がいる西部に連絡を！」

オーカスは、自分の全てをブロン・ドウの両の豪腕に託した。

その頃のケ빈は、地下へ続く階段に向けてひたすら足を進めていた。

所在が掴めないムラマサよりも、まずは行き先が明確なシレーヌを追うことにしたのだ。

階段にたどり着いたケ빈は倒れ伏したもう一人の付き人、シンと呼ばれた方を発見した。

「おい、大丈夫か！？」

「あ、あなたは……！」

幸い、意識はあるようだ。

「話はセიმつて奴から聞いた！ 姫さんは？」

「シレーヌ様は、こちらの隠し扉に向かわせました。私は……私は、もう駄目です」

シンはそう言って苦笑した。

「駄目って、言っちゃあ何だがあんた、傷一つ無いぜ？」

「いいや、駄目です！ さっき見知らぬ少女に触られた場所が、ほとんど私の頭を不安と不快感で埋めて行くのです！ う、うあ、あああ……」

シンは自身の右肩を押さえて、不快感でいっぱいと言わんばかりの表情を作った。

「隠し扉の開け方は！」

「その本棚の赤い本を、強く押し込んで下さい……」

「こうか！ うわっ、ホントだ！」

ケビンが言われた通りの行動をすると、本棚がかかった壁が音を立てずに開いた。

「私の代わりに、頼みます！」

「わかった。あんたに六神の加護のあらんことを、じゃあな！」

シンに手を合わせた後、ケビンは壁の向こうへ全力で走った。走って、走って、そして。

「姫さん！」

「……ケビン、さん？」

ついに、タルの中でガタガタ震えていたシレーヌを見つけた。

「そうだ、ケビンだ！ シンって人に教えてもらった！」

「シンは、シン・ウィルは無事でしたか……？」

「そ、それが」

言いかけて、ケビンは口をつぐんだ。

セイムの気持ちを無駄にしくなかつたからだ。

しかし、その空白はシンの身に何かがあったことを少女に理解させるには充分だった。

「シン、シイン！」

「あつ、姫さん！？ ……くそっ、俺は駄目な奴だな！」

たまらず走り出したシレーヌをケビンは逃がしてなるものかと夢中で追いかけた。

再び不落壁、北部。

両脚を失い、自身の風でなんとか浮いているであろうブロン・ドウが、未だ無傷のゴルドーに相對していた。

「オズワルド、化け物め……」

「いやあ、大したものだ！ 五分持つとは想定外」

「貴様の想像とやらに、振り回されてなるものかよ！」

オーカスは魔力を維持すべく全身に踏ん張りを込める。

目からの流血で視界の確保も困難な彼だが、足元で自身の血が波をたてているのは感じる事ができた。

「う、くうっ……」

意識が遠のく、口の中で血が固まる。

「せめて、一太刀！」

遠のいた意識を自身の脚にナイフを突き刺して無理矢理取り戻した彼は、魔石にひびを入れる勢いで魔力を流し込む。

「風よ、我に力を！ 我に仇なす敵を討て！」

風の鎧は強度を高めるべく彼の方へと凝縮していき、同時にブロン・ドウの魔力伝達パイプや肩部サブセンサ等の打たれ弱い部位が音を立てて吹き飛んでいく。

「何故貴様が若返り、我々に敵対したかなどは、最早どうでもいい……死ぬ、オオオズツワルドッ！」

操者槽と両腕を残したブロン・ドウが、全身の輝きに身を焦がしながらゴルドーに突撃をかける。

「ああ、オーカス、貴様を軽視した私を許してくれ……やはり貴様は大した奴だ」

「今更詫びたとて、遅い！」

「だからこそだ、オーカス。敬意を表して一撃で殺す！」

ゴルドーの左腕を風が包む。

「竜巻！」

その右腕を振り上げた瞬間、ブロン・ドウの真下に巨大な風の竜が現れ、機体が纏った風の鎧ごと飲み込んだ。

「こ、これはっ！？」

「さよならだ、オーカス。来世に六神の加護あれと言つべきところだが、私が直々に輪廻の輪から消し去つてやる」

ゴルドーは、先程ブロン・ブロンを葬る際に使用した右腕に雷を纏わせ、振り上げる。

「紫電！」

オズワルドの声に応ずるが如く上空から現れた雷の竜は、風の竜を食い破った。

「フフフ……ヒヤハハハハッ、アーツハハハハハ！ ロジャース！ ゴルドーを使いやすくしてくれてありがとう！」

「閣下の喜びは、私の喜びであります故に」

「確かオーカスは、西に銀色がいると言つたな」

「はっ、私以外にリミッター付きでゴルドーを動かした稀有な奴でございます」

嬉しそうに報告するロジャースに、オズワルドの顔が綻ぶ。

「惚れ込んでいるな、ロジャース」

「自慢の部下、だった奴でございまして」

「そうか……よし、次は東だ！ メインディッシュは最後に戴く！」
二機の魔機が東部に向けて猛進する。

後には不落壁だった何かと、大量のブロン・ブロンの残骸。

しかし、そこにブロン・ドウの痕跡は一片たりとも存在しなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7094z/>

リベンジ！

2011年12月28日20時56分発行